

## アジア・アフリカ学術基盤形成事業 平成 21 年度 実施計画書

### 1. 拠点機関

日本側拠点機関：	旭川医科大学
( インドネシア ) 拠点機関：	インドネシア厚生省疾病対策環境衛生総局
( タイ ) 拠点機関：	マヒドン大学熱帯医学部
( 中国 ) 拠点機関：	四川省寄生虫病研究所
( モンゴル ) 拠点機関：	モンゴル厚生省感染症センター
( カメルーン ) 拠点機関：	カメルーン国立医学研究所

### 2. 研究交流課題名

(和文)： アジア・アフリカで流行している人畜共通寄生虫病研究拠点形成 (II)  
(交流分野：寄生虫学、熱帯医学)

(英文)： Establishment of Research Center for Cestode Zoonoses in Asia and Africa (II)  
(交流分野：Parasitology, Tropical Medicine)

研究交流課題に係るホームページ <http://www.asia-africa-platform.asahikawa-med.ac.jp>

### 3. 採用年度

平成 21 年度 ( 1 年度目)

### 4. 実施体制

#### 日本側実施組織

拠点機関：旭川医科大学

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：学長・吉田 晃敏

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：医学部・寄生虫学講座・教授・伊藤 亮

協力機関：鳥取大学農学部

事務組織：総務部・総務課

**相手国 (地域) 側実施組織** (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国 (地域) 名：インドネシア

拠点機関：(英文) Directorate General, Disease Control and Environmental Health,  
Ministry of Health Indonesia

(和文) インドネシア厚生省疾病対策環境衛生総局

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Sub-Directorate of Cardio-Vascular Disease, Head, Dr. T. Wandra

協力機関：（英文） Udayana University  
（和文） ウダヤナ大学

（2）国（地域）名：タイ

拠点機関：（英文） Faculty of Tropical Medicine, Mahidol University  
（和文） マヒドン大学熱帯医学部

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Faculty of Tropical Medicine, Vice Dean, J. Waikagul

協力機関：（英文） Chengmai University School of Medicine  
（和文） チェンマイ大学医学部

（3）国（地域）名：中国

拠点機関：（英文） Sichuan Institute of Parasitic Disease Control  
（和文） 四川省寄生虫病研究所

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Director General, Dr. D. Qiu

協力機関：（英文） Xinjiang Medical University  
（和文） 新疆医科大学

協力機関：（英文） Qinghai Institute of Endemic Diseases  
（和文） 青海省地方病研究所

（4）国（地域）名：モンゴル

拠点機関：（英文） National Center for Communicable Diseases  
（和文） モンゴル厚生省感染症センター

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Director General, Dr. N. Dulmaa

協力機関：（英文） Health Sciences University of Mongolia  
（和文） モンゴル健康科学大学

（5）国（地域）名：カメルーン

拠点機関：（英文） Institute of Medical Research and Study of Medical Plants  
（和文） カメルーン国立医学研究所

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Professor, Dr. R. Moyou-Somo

## 5. 全期間を通じた研究交流目標

WHO エキノコックス症非公式作業部会において「アジアにおける免疫・遺伝子研究レファレンスセンター」に指定され、寄生虫学の専門誌として最も歴史が古く、国際的に最も高い評価を得ている *Parasitology*（英国寄生虫学会がケンブリッジ大学から出版）のアジアから唯一の編集委員、また日本寄生虫学会が出版している国際専門誌 *Parasitology International* の編集委員、さらに米国立衛生研究所が中心になって立ち上げた、商業誌から独立した専門誌のひとつである *PLoS Neglected Tropical Diseases* の編集員として国際的なレベルアップ

活動を展開してきている実績に基づき、アジア・アフリカにおける研究水準の向上、研究者の質の向上、研究論文作成の指導も含めたリーダーシップを確保し、専門である人畜共通寄生虫病（特にエキノコックス症、脳囊虫症他）に関する分子から流行の現場までの総合研究に関する共同研究を展開し、参加国における医学研究水準の向上に資することを目標とする。

## 6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

平成 21 年度から開始

## 7. 平成 21 年度研究交流目標

① 各国で問題になっており、共通の寄生虫病対策プロジェクトを共同研究として実施し、各国の若手研究者を日本に招へい、自国の研究材料を自分で解析させ、各国の成績を有機的に取りまとめる形の共同研究論文を完成させる。

1) インドネシアではバリ島その他の島におけるテニア症、囊虫症ならびに土壌伝播性寄生虫病、2) タイではカンチャナブリ地方を中心に人体寄生 3 種類のテニア条虫、囊虫症ならびに土壌伝播性寄生虫病、3) 中国では四川省、青海省を中心に、エキノコックス症、テニア症、囊虫症、4) モンゴルではエキノコックス症、テニア症、5) カメルーンでは肺吸虫症、囊虫症等を対象疾患として、それぞれの国の拠点機関が中心になり流行疫学調査を実施する。各国の研究者を旭川医科大学に招聘し、サンプルの解析、論文作成を含む技術移転セミナーを実施し、国際共同研究論文作成の指導を行う。今後の各国間での協力体制構築について、E-mail で意見交換、討論会情報交換を行うためのシステムを設置し、自力で研究を実施できる若手研究者の育成を図る。

②平成 21 年 1 2 月にタイで開催される第 6 回食品媒介人畜共通寄生虫病国際セミナーの場で、各国の若手研究者、代表研究者を招き、本事業による国際シンポジウムを主催する。この国際セミナーの前にタイ、カンチャナブリでのテニア症に関する疫学調査に参加し、技術指導を行う。

③平成 22 年 1 ～ 2 月に各国の拠点あるいは協力研究機関の研究者を旭川医科大学に招聘し、遺伝子解析技術移転セミナーを開催し、同時に各国のサンプルを用いる遺伝子解析成績を有機的に取りまとめる共同作業を実施し、共同研究論文を完成させる。

## **8. 平成21年度研究交流計画概要**

### **8-1 共同研究**

上記7-①に記したように、各国の拠点研究機関が中心になる研究を指導し、平成22年1～2月に各国の拠点あるいは協力研究機関の研究者を旭川医科大学に招聘し、それぞれの国の成績を有機的にまとめる形での、技術移転セミナー・共同研究を実施する。

### **8-2 セミナー**

12月にタイ、バンコックで開催される第6回食品媒介人畜共通寄生虫病国際セミナーで「人獣共通条虫症シンポジウム」を主催する。このシンポジウムの後で口頭発表セッションを設け、本事業で招聘する研究者の発表の場、情報交換、意見交換の場を設ける。

(7-②)

1～2月に旭川医科大学で共同研究を取りまとめる目的の技術移転セミナーを実施する。

(7-③)

### **8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）**

上記の活動を通して、定期的に情報交換、意見交換の場をE-mailで発信し、若手研究者の積極的な参加を促し、研究意欲の活性化に努める。

## 9. 平成21年度研究交流計画総人数・人日数

### 9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人/人日〉	インドネ シア 〈人/人日〉	タイ 〈人/人日〉	中国 〈人/人日〉	モンゴル 〈人/人日〉	日本 (フランス) 〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉		(1/5)	3/23 (4/25)		1/15		4/38 (5/30)
インドネシア 〈人/人日〉	1/15		(1/5)				1/15 (1/5)
タイ 〈人/人日〉	1/15						1/15
中国 〈人/人日〉	1/15		(1/5)				1/15 (1/5)
モンゴル 〈人/人日〉	1/15						1/15
日本(フランス) 〈人/人日〉	1/10						1/10
合計 〈人/人日〉	5/70	(1/5)	3/23 (6/35)		1/15		9/108 (7/40)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。(合計欄は( )をのぞいた人・日数としてください。)

### 9-2 国内での交流計画

2/10 〈人/人日〉
-------------

## 10. 平成21年度研究交流計画状況

### 10-1 共同研究

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-01	研究開始年度	2009	研究終了年度	2011
研究課題名	(和文) アジア・アフリカ (インドネシア) における人獣共通条虫症対策研究				
	(英文) Towards the control of cestode zoonoses in Asia (Indonesia)				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 伊藤 亮・旭川医科大学・教授				
	(英文) A. Ito, Asahikawa Medical College, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	T. Wandra, Directorate General, Disease Control and Environmental Health, Ministry of Health, Head of Sub-Directorate of Cardio-Vascular Disease				
交流予定人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先 派遣元	日本 〈人/人日〉	インドネシア 〈人/人日〉		計 〈人/人日〉
	日本 〈人/人日〉		(1/5)		(1/5)
	インドネシア 〈人/人日〉	1/15			1/15
	合計 〈人/人日〉	1/15	(1/5)		1/15 (1/5)
	② 国内での交流 1人/5人日				
21年度の研究 交流活動計画及 び期待される成 果	2002年から毎年実施してきているインドネシアにおける人獣共通条虫症研究調査を指導する。北スマトラ、バリにおけるテニア症、囊虫症、土壌伝播性寄生虫症に関するこれまでの研究成果をまとめ、国際専門誌への発表を指導する。本年11月にバリ、デンパサールで開催されるインドネシア脳疾患学術研究集会の主要テーマの一つとして脳囊虫症に関する基調講演を引き受け、インドネシア国内の医学・医療関係者との対策に向けた意見交換、情報交換を試みる。本事業の主な目的である各国間で共通の寄生虫病対策研究に向けた総合的な取り組みを機能させるため、インドネシアで準備した寄生虫、ヒトの糞便、ヒトの血清を22年1月に旭川医科大学に持参させ、技術移転セミナーを実施、セミナーを通して得られる各国の研究成果を有機的に取りまとめ、国際専門誌に共同研究論文を発表させる。同時に各国間での今後の協力体制について意見交換を試みる。自力で寄生虫病対策に能動的に取り組める若手人材育成が				

	<p>目的である。この活動を通し、インドネシア厚生省、ウダヤナ大学、インドネシア大学他との寄生虫病対策に向けた協力体制を強化できる。インドネシア厚生省の技術顧問になる可能性があり、2国間協力体制の強化が期待できる。人体囊虫症を引き起こすテニア（有鉤条虫）感染者ならびに囊虫症患者の検査法、囊虫症を引き起こさないテニア（無鉤条虫、アジア条虫）と有鉤条虫の迅速鑑別法の開発、人へのテニア感染源となる食肉の安全性検査法（家畜の感染の有無の確認法）の開発、流行地での疫学調査への応用、国民の健康増進に大きく役立つと期待できる。これらの検査法の確立はすべての参加国の拠点研究機関間で共有され、国際的に評価され、利用されるべき成果、システム構築になる。</p>	
日本側参加者数		
8 名	(13-1 日本側参加者リストを参照)	
インドネシア側参加者数		
6 名	(13-2 インドネシア側参加者リストを参照)	
( ) 国 (地域) 側参加者数		
名	(13-3 ( ) 国側参加者リストを参照)	

整理番号	R-02	研究開始年度	2009	研究終了年度	2011
研究課題名	(和文) アジア・アフリカ (タイ) における人獣共通条虫症対策研究 (英文) Towards the control of cestode zoonoses in Asia and Africa (Thailand)				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 伊藤亮・旭川医科大学・教授 (英文) A. Ito, Asahikawa Medical College, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	J. Waikagul, Faculty of Tropical Medicine, Mahidol University, Vice Dean				
交流予定人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先 派遣元	日本 <人/人日>	タイ <人/人日>	<人/人日>	計 <人/人日>
	日本 <人/人日>		1/10 (1/10)		1/10 (1/10)
	タイ <人/人日>	1/15			1/15
	<人/人日>				
	合計 <人/人日>	1/15	1/10 (1/10)		2/25 (1/10)
	② 国内での交流 1人/5人日				
21年度の研究 交流活動計画及 び期待される成 果	2006年から毎年実施してきているタイ、カンチャナブリ地方における人獣共通条虫症研究調査を指導し、テニア症、囊虫症、土壌伝播性寄生虫症に関するこれまでの研究成果をまとめ、国際専門誌への発表を指導する。本事業の主な目的である各国間で共通の寄生虫病対策研究に向けた総合的な取り組みを機能させるため、タイで準備した寄生虫、ヒトの糞便、ヒトの血清を22年1月に旭川医科大学に持参させ、技術移転セミナーを実施、セミナーを通して得られる各国の研究成果を有機的に取りまとめ、各国の研究者が参加する形の共同研究論文を国際専門誌に発表させる。同時に各国間での今後の協力体制について意見交換を試みる。自力で寄生虫病対策に能動的に取り組める若手人材育成が目的である。なお、12月2-4日にバンコックで開催される第6回食品媒介、飲料水媒介人畜共通寄生虫病国際セミナーの主要シンポジウムとして「人獣共通条虫症に関する分子生物学的アプローチ」を本事業の活動として主催する。国際セミナーの直前に計画されているカンチャナブリ地方でのテニア症、囊虫症、土壌伝播性寄生虫症に関する調査に参加し、技術指導を行う。バンコックでの国際セミナーではプログラム委員会の委員(海外の研究者、約5,6名)を委嘱されており、開会式でタイの厚生大臣、				

<p>マヒドン大学熱帯医学部長その他の要人と意見交換する時間が得られる。これらの行政、学術の責任者との交流を深め、タイにおける寄生虫病対策に向けた意見交換、ネットワークの強化が期待できる。人体囊虫症を引き起こすテニア（有鉤条虫）感染者ならびに囊虫症患者の発見法、囊虫症を引き起こさないテニア（無鉤条虫、アジア条虫）と有鉤条虫の迅速鑑別法の開発が可能になると期待できる。カンチャナブリ地方では3種類のテニア症が同一地域で流行しており、3種類の鑑別法の評価に最も適した国のひとつと言える。囊虫症患者のスクリーニング法を確立することによる国際的なインパクトは非常に大きい。これらの検査法の確立はすべての参加国の拠点研究機関間で共有され、国際的に評価され、利用されるべき成果、システム構築になる。</p>	
日本側参加者数	
8 名	(13-1 日本側参加者リストを参照)
タイ側参加者数	
4 名	(13-2 タイ側参加者リストを参照)
( ) 国 (地域) 側参加者数	
名	(13-3 ( ) 国側参加者リストを参照)

整理番号	R-03	研究開始年度	2009	研究終了年度	2011
研究課題名	(和文) アジア・アフリカ (中国四川省) における人獣共通条虫症対策研究				
	(英文) Towards the control of cestode zoonoses in Asia and Africa (Sichuan, China)				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 伊藤 亮・旭川医科大学・教授				
	(英文) A. Ito, Asahikawa Medical College, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	D. Qiu, Sichuan Institute of Parasitic Diseases Control, Director				
交流予定人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先 派遣元	日本 <人/人日>	中国 <人/人日>	<人/人日>	計 <人/人日>
	日本 <人/人日>				
	中国 <人/人日>	1/15			1/15
	<人/人日>				
	合計 <人/人日>	1/15			1/15
	② 国内での交流 0人/0人日				
21年度の研究 交流活動計画及 び期待される成 果	<p>2000年から毎年実施してきている中国四川省ならびに周辺地域における人獣共通条虫症研究調査を指導し、テニア症、囊虫症、エキノコックス症に関するこれまでの研究成果をまとめ、国際専門誌への発表を指導する。本事業の主な目的である各国間で共通の寄生虫病対策研究に向けた総合的な取り組みを機能させるため、中国で準備した寄生虫、ヒトの糞便、ヒトの血清を22年1月に旭川医科大学に持参させ、技術移転セミナーを実施、セミナーを通して得られる各国の研究成果を有機的に取りまとめ、各国の研究者が参加する形の共同研究論文を国際専門誌に発表させる。同時に各国間での今後の協力体制について意見交換を試みる。自力で寄生虫病対策に能動的に取り組める若手人材育成が目的である。中国における寄生虫症の流行は中国国内の問題にとどまらず全世界規模で問題を引き起こしかねないことから、中国政府寄生虫病対策センター（上海）とも情報交換、協力体制を構築したい。</p> <p>人体囊虫症を引き起こすテニア（有鉤条虫）感染者ならびに囊虫症患者の検査法、囊虫症を引き起こさないテニア（無鉤条虫、アジア条虫）と</p>				

<p>有鉤条虫の迅速鑑別法の開発、確立は流行拡大阻止に向けた対策策定で最も重要な研究課題である。四川省でも3種類のテニア条虫症が同所的に流行しており、迅速鑑別法の評価が可能になると期待できる。豚肉消費が食の中心である中国では囊虫症は国民病の一つであり、囊虫症対策に必要な検査法の確立は非常に大きな貢献になる。また、中国は世界最悪のエキノコックス症の流行地と推定されており、エキノコックス症患者の早期発見法、人への感染源となる動物のリアルタイムでの検査法の開発は流行地での疫学調査への応用が可能になると期待できる。これらの検査法の確立はすべての参加国の拠点研究機関間で共有され、国際的に評価され、利用されるべき成果、システム構築になる。</p>	
日本側参加者数	
8 名	(13-1 日本側参加者リストを参照)
中国側参加者数	
7 名	(13-2 中国側参加者リストを参照)
( ) 国 (地域) 側参加者数	
名	(13-3 ( ) 国側参加者リストを参照)

整理番号	R-04	研究開始年度	2009	研究終了年度	2011
研究課題名	(和文) アジア・アフリカ (モンゴル) における人獣共通条虫症対策研究				
	(英文) Towards the control of cestode zoonoses in Asia and Africa (Mongolia)				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 伊藤 亮・旭川医科大学・教授				
	(英文) A. Ito, Asahikawa Medical College, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	N. Dulmaa, National Center for Communicable Diseases, Director General				
交流予定人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先 派遣元	日本 <人/人日>	モンゴル <人/人日>	<人/人日>	計 <人/人日>
	日本 <人/人日>		1/15		1/15
	モンゴル <人/人日>	1/15			1/15
	<人/人日>				
	合計 <人/人日>	1/15	1/15		2/30
	② 国内での交流 0人/0人日				
21年度の研究 交流活動計画及び期待される成果	<p>2002年から指導してきているモンゴルにおけるテニア症、囊虫症、エキノコックス症に関するこれまでの研究成果をまとめ、国際専門誌への発表を指導する。本事業の主な目的である各国間で共通の寄生虫病対策研究に向けた総合的な取り組みを機能させるため、モンゴルで準備した寄生虫、ヒトの糞便、ヒトの血清を22年1月に旭川医科大学に持参させ、技術移転セミナーを実施、セミナーを通して得られる各国の研究成果を有機的に取りまとめ、各国の研究者が参加する形の共同研究論文を国際専門誌に発表させる。同時に各国間での今後の協力体制について意見交換を試みる。自力で寄生虫病対策に能動的に取り組める若手人材育成が目的である。モンゴル訪問中にモンゴル健康科学大学と学術調印に向けた最終合意を取り付けたい。</p> <p>モンゴル厚生省感染症センターにおける寄生虫病対策への技術指導として、伊藤は国立の診断センター構築を提言してきている。センター長と昨年来 JICA, JST による地球規模の感染症対策事業の1つとして、モンゴルとの2国間事業計画を策定し、申請を計画している。本事業活動を通し、タイムリーに申請が出されれば、採択される可能性が高い。モン</p>				

	<p>ゴル国民の健康増進の観点から大きな貢献になると期待される。モンゴルにおける寄生虫流行把握システムは十分でなく、エキノコックス症は中国同様に大流行していると予測されることから、エキノコックス症患者の早期検査法、人への感染源となる動物における感染調査、疫学研究を推進させ、リアルタイムでの検査法と流行地での疫学調査への応用、流行把握システムの構築が可能になると期待でき、国民の健康増進に大きく役立つと期待できる。これらの検査法の確立はすべての参加国の拠点研究機関間で共有され、国際的に評価され、利用されるべき成果、システム構築になる。</p>	
日本側参加者数		
8 名	(13-1 日本側参加者リストを参照)	
モンゴル側参加者数		
4 名	(13-2 モンゴル側参加者リストを参照)	
( ) 国 (地域) 側参加者数		
名	(13-3 ( ) 国側参加者リストを参照)	

整理番号	R-05	研究開始年度	2009	研究終了年度	2011
研究課題名	(和文) アジア・アフリカ (カメルーン) における人獣共通条虫症対策研究				
	(英文) Towards the control of cestode zoonoses in Asia and Africa (Cameroon)				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 伊藤 亮・旭川医科大学・教授				
	(英文) A. Ito, Asahikawa Medical College, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	R. Moyou-Somo, Institute of Medical Research and Study of Medical Plants , Professor				
交流予定人数 (※日本側予算によらない交流についても、カッコ書きで記入のこと。)	① 相手国との交流				
	派遣先	日本	カメルーン		計
	派遣元	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
	日本				
	カメルーン				
合計					
	② 国内での交流 0人/0人日				
21年度の研究 交流活動計画及び期待される成果	2006年から指導してきているカメルーンにおけるテニア症、囊虫症、肺吸虫症、土壌伝播性寄生虫症に関するこれまでの研究成果をまとめ、国際専門誌への発表を指導する。本事業の主な目的である各国間で共通の寄生虫病対策研究に向けた総合的な取り組みを機能させるため、カメルーンで準備した寄生虫、ヒトの糞便、ヒトの血清を郵送してもらい、現在、旭川医科大学に留学している Miss. A. Nkouawa が中心になり、解析し、共同研究論文を作成する。また、上記のアジア各国における人獣共通条虫症対策研究に必要な技術開発を旭川医科大学寄生虫学講座の教員の指導のもと、Nkouawa が実施しており、彼女をはじめとする旭川医科大学ならびに鳥取大学の研究者全員とアジア各国の研究者の交流、共同研究成果の有機的なとりまとめを目的とする技術移転セミナーを実施し、国際共同研究論文をまとめさせる。同時に各国間での今後の協力体制について意見交換を試みる。自力で寄生虫病対策に能動的に取り組める若手人材育成が目的である。相手国への出張を含む計画はない。				

	<p>共同研究を通してカメルーンにおける寄生虫病対策事業への事実確認に基づき信頼性の高い検査法の導入の必要性に関する提言、技術協力の機会が増えると期待される。人体囊虫症を引き起こすテニア（有鉤条虫）感染者ならびに囊虫症患者の検査法、囊虫症を引き起こさないテニア（無鉤条虫）と有鉤条虫の迅速鑑別法の開発、脳疾患を引き起こす他の寄生虫疾患（肺吸虫症、イヌ回虫症）との鑑別法の開発、流行地での疫学研究への応用が可能になると期待できる。これらの検査法の確立はすべての参加国の拠点研究機関間で共有され、国際的に評価され、利用されるべき成果、システム構築になる。</p>	
日本側参加者数		
7 名	(13-1 日本側参加者リストを参照)	
カメルーン側参加者数		
1 名	(13-2 カメルーン側参加者リストを参照)	
( ) 国（地域）側参加者数		
名	(13-3 ( ) 国側参加者リストを参照)	

## 10-2 セミナー

—実施するセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-01
セミナー名	(和文) 日本学術振興会主催 アジア・アフリカ学術基盤事業 人獣共通条虫症シンポジウム (英文) JSPS-AASP Symposium on Cestode Zoonoses
開催時期	平成 21 年 12 月 2 日 ~ 平成 21 年 12 月 4 日 (3 日間)
開催地 (国 (地域) 名、 都市名、会場名)	(和文) タイ、バンコック、国際会議場 (英文) Thailand, Bangkok, International Congress Center
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 伊藤 亮・旭川医科大学・教授 (英文) A. Ito, Asahikawa Medical College, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	J. Waikagul, Faculty of Tropical Medicine, Mahidol University, Vice Dean

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国(タイ)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	2/13
	B.	0
	C.	3/15
タイ 〈人/人日〉	A.	0
	B.	0
	C.	4/12
インドネシア 〈人/人日〉	A.	0
	B.	0
	C.	1/5
中国 〈人/人日〉	A.	0
	B.	0
	C.	1/5
合計 〈人/人日〉	A.	2/13
	B.	0/0
	C.	10/37

A. セミナー経費から負担

B. 共同研究・研究者交流から負担

C. 本事業経費から負担しない (参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。)

セミナー開催の目的		1990年に第1回目の国際セミナーが開催され、今回が第6回目である。この間第3回目から「人畜共通条虫症」を主要シンポジウムとして主催、共催してきた。今回は旭川医科大学、鳥取大学で実施され、国際的リーダーシップを確保している「人獣共通条虫症対策を目的とする分子生物学的取り組み研究」を紹介する形のシンポジウムを企画し、アジア・アフリカにおける研究拠点としての活動を世界に紹介することを目的とする。	
期待される成果		「全世界における人畜共通条虫症（魚ならびに肉から感染する条虫全般にわたる、分子分類学的な問題、雑種形成の問題、遺伝子検査に基づく診断法の開発について最先端の研究成果）を本事業参加者が全世界に発信することは、アジアにおける研究が世界の最先端に位置していることを全世界に認知していただく意味でも重要である。	
セミナーの運営組織		国際セミナーの運営組織委員長はマヒドン大学のDr. J. Waikagulである。本申請代表者は組織委員の一人である。	
開催経費 分担内容 と概算額	日本側	内容	金額
		旅費	800,000円
		会場費	300,000円
		旅費・会場費に係る消費税	40,000円
		合計	1,140,000円
	タイ側	内容	金額
		大会設営費	5,000,000円
		合計	5,000,000円
	中国、インドネシア側	内容	金額
		中国の拠点研究者参加旅費	300,000円
		インドネシアの拠点研究者参加旅費	300,000円
		合計	600,000円

整理番号	S-02
セミナー名	(和文) 日本学術振興会主催 アジア・アフリカ学術基盤形成事業 人獣共通条虫症技術移転セミナー (英文) JSPS-AASP Technical Transfer Seminar on Cestode Zoonoses
開催時期	平成 22 年 1 月 18 日 ~ 平成 22 年 1 月 30 日 (13 日間)
開催地 (国 (地域) 名、 都市名、会場名)	(和文) 日本、旭川市、旭川医科大学 (英文) Japan, Asahikawa, Asahikawa Medical College
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 伊藤 亮・旭川医科大学・教授 (英文) A. Ito, Asahikawa Medical College, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国(日本)	
	A.	B.
インドネシア 〈人/人日〉	A.	0
	B.	1/15
	C.	0
タイ 〈人/人日〉	A.	0
	B.	1/15
	C.	0
中国 〈人/人日〉	A.	0
	B.	1/15
	C.	0
モンゴル 〈人/人日〉	A.	0
	B.	1/15
	C.	0
フランス(日本 側参加者) 〈人/人日〉	A.	1/10
	B.	0
	C.	0
日本 〈人/人日〉	A.	0
	B.	0
	C.	7/105
合計 〈人/人日〉	A.	1/10
	B.	4/60
	C.	7/105

A. セミナー経費から負担

B. 共同研究・研究者交流から負担

C. 本事業経費から負担しない（参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。）

セミナー開催の目的		アジア・アフリカで流行している人獣共通条虫症対策研究拠点を形成するため、本事業で展開する各国の拠点並びに協力研究機関から若手研究者並びに代表研究者を招聘し、各国で入手された研究材料を用いる遺伝子解析その他を技術移転セミナーとして実施し、セミナーで得られる結果を共同研究論文に有機的に取り込むことを目的とする。研究代表者には各国での取り組みの現状分析報告をしていただき、その上で今後の協力体制構築について意見交換を行う。	
期待される成果		アジア・アフリカで流行している難治性の人獣共通条虫症に関する拠点研究機関として旭川医科大学を位置付け、これらの地域における研究推進、国際リーダーシップを確立していく。	
セミナーの運営組織		旭川医科大学・寄生虫学講座が主催し、鳥取大学農学部獣医学科・寄生虫学講座が協力する。	
開催経費 分担内容 と概算額	日本側	内容	金額
		外国人研究者招聘旅費	400,000 円
		会場費	20,000 円
		外国旅費に係る消費税	20,000 円
		合計	440,000 円
	( ) 国 (地域) 側	内容	金額
		大会設営費	円
	( ) 国 (地域) 側	内容	金額

10-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

① 相手国との交流

派遣先 派遣元	日本 〈人／人日〉	中国 〈人／人日〉	モンゴル 〈人／人日〉	計 〈人／人日〉
日本 〈人／人日〉				
タイ 〈人／人日〉				
中国 〈人／人日〉				
合計 〈人／人日〉				
② 国内での交流 0人／0人日				

### 11. 平成21年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	123,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	3,740,000	
	謝金	600,000	
	備品・消耗品購入費	0	
	その他経費（シンポ会場費）	320,000	
	外国旅費・謝金に係る消費税	217,000	
	計	5,000,000	研究交流経費配分額以内であること
委託手数料		500,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。 また、消費税額は内額とする。
合計		5,500,000	

### 12. 四半期毎の経費使用見込み額及び交流計画

	経費使用見込み額（円）	交流計画人数<人/人日>
第1四半期	800,000	1/15
第2四半期	0	0/0
第3四半期	1,640,000	3/23
第4四半期	2,560,000	7/80
合計	5,000,000	11/118